「伝え合う力」をはぐくむプレゼンテーション
―ポスター・セッションによる表現指導―

千葉県立○○○高等学校　○○　○○（国語科）

一　はじめに

本校の生徒は、仲間と話しているような雰囲気の中で「自己紹介」などをさせると、こちらが驚くほど屈託なく、自由にいろいろなことを話すことができる。しかし、その内容はしばしば論理性を欠き、語彙も拙いものが多く、相手にわかりやすく伝えるための言語能力が十分身に付いているとは言い難い。また、授業だけではなく、学校生活のあらゆる場面で「相手の意見を的確に聞き、理解する」力が弱くなっていることを感じる。これは、現在の高校生共通の問題であり、平成二十一年三月に告示された新学習指導要領においても「言語活動の充実」や「伝え合う力」を高めることが今まで以上に重要視されていることからも推察される。

そこで、「話す力」「聞く力」を育てるために、これまで授業にプレゼンテーションなどを取り入れてきた。しかし、発表者が大勢の聞き手の前に立ち発表を行うやり方では用意してきた原稿を読むだけの「棒読み」で終わってしまい、目標としていた「話す力」をはぐくむには不十分であった。また、教室の雰囲気が堅くなってしまい、気軽に質疑応答しにくいという問題点を感じてきた。

このような問題点を解決するためには、近年、学会や研究発表会などで主流になってきているポスター・セッション形式によるプレゼンテーションが効果的ではないかと考えた。ポスター・セッションのメリットは、次の三点である。

①発表者と聞き手の間が近いため、質疑応答などの密なコミュニケーションがしやすく、より聞き手を意識した発表が行えるようになる。

②同時に複数の発表を行うことで、発表者は比較的緊張せずに発表ができるし、全体の発表時間を短縮することもできる。

③活発な質疑応答を行うことで発表者も聞く側も「聞く力」の向上が図れる。

本校では、情報理数科の研究発表会にこの形式が取り入れられており、生徒はこちらが予想する以上にすばらしい発表を行い、外部の方からも毎年好評を得ている。私も四年前に情報理数科が始まった時から、表現面での指導者としてこれらの授業に関わり、指導に当たってきた。そこで、ポスター・セッションを国語の授業に取り入れることで「伝え合う力」を効果的に育成できるのではないかと考えたのがこの研究の動機である。

二　研究仮説

これまで実践してきたプレゼンテーションは、一方的に話し手が発表を行う形式であった。そのため、聞き取りやすくスムーズに話す訓練にはなっても、聞き手が理解しているかどうかをその時々に確認し、当意即妙の受け答えする力をはぐくむことが課題であった。また、四十人近い人の前で話すことは、大人でも緊張することであり、生徒の多くは発表を嫌がる。逆に聞き手側は人数が多いことで気が緩み、集中して聞くことが難しく、積極的に質問をする雰囲気が作りにくい。これでは、「話す力」「聞く力」の指導に効果的であるとは言えない。

そこで、ポスターの前に発表者が立ち、そこに聞き手が数人ずつ集まって行うポスター・セッションなら、発表者と聞き手の距離が近い

ために、より聞き手を意識した説明を行うことができると考えた。また、同じ教室の中で、複数の発表を同時に行うことで、聞き手の数が少ないことと、他にも発表者がいて自分だけが注目されていないことから、発表者は緊張せずに発表できる。さらに、説明がひととおり終わった後に、質疑応答を行う際にも、発表者と聞き手の距離が近いために質問しやすい。以上のことから、将来の社会人として、より実用的な「話す力」「聞く力」の学習に効果的であると考えた。

三　研究方法

（一）ポスター・セッションについて

ポスター・セッションとは、壁またはホワイトボードなどに図表やキーワードを書いたポスターを掲示し、それを資料として目の前の聞き手に対して自分の研究を説明するという発表方法である。下の写真のように、発表者は、自分で作成した資料を順番に示しながら、身振り手振りや表情までも使って、聞き手の反応をじかに感じながら説明を行うことができる。

また、聞き手にとっても資料が見やすく、スライドのようにすぐに消えてしまわないので、前の資料に戻って考えることができる点で、これまで実践してきたプレゼンテーションよりも理解しやすい。

発表の基本的な流れは、ポスターの前に聞き手がある程度集まってきたところで、発表者が説明をひととおり行い、その後で、質疑応答を行う形式が一般的である。ポスターは、大きな一枚の紙に書かれている場合と、十枚から二十枚に分けた紙を並べて張り出す場合がある。

（二）生徒アンケート

本校の情報理数科二年の生徒は、「情報実習」という授業で、自分たちでテーマを決めて長い時間をかけて実験や調査・研究を行っている。その成果を連携大学の教授や保護者の方々に発表するのが、毎年二月に行われている情報理数科研究発表会である。

この研究発表会で行うポスター・セッションの指導を、私も毎年情報理数科の先生方とともに行っている。そこで、発表会終了後の授業でアンケートを実施した。（回答数40）

質問1　表現力・コミュニケーション能力を付けるために、ポスター・セッションは、有効であると考えますか。

とても有効	20%	有効	55%
あまり効果がない	20%	全く効果がない	5%

質問2　自分に表現力が付いたと実感しましたか。

とても実感した	10%	実感した	50%
特に感じない	38%	全く感じない	2%

質問3　またやってみたいと思いますか。

是非やってみたい	10%	やってもよい	50%
できればやりたくない	30%	絶対やりたくない	10%

アンケートの結果から、三分の二の生徒が表現力・コミュニケーション能力を付けるために有効であると感じていることがわかる。さらに、またやってもよいと考える生徒が半数以上いることからも、発表を嫌がらずに積極的に取り組むのではないかと考えられる。このことからも、ポスター・セッションを現代文の授業に取り入れることは、「話す力」「聞く力」を身に付けさせる指導に効果があることが予想される。

四　実践計画

実施時期	学習内容	指導のねらい	学習活動	評価方法
平成二十二年 五月	**（予備実践）** 「村上春樹」 研究レポート	文学作品のレポートの書き方を理解させる。	インターネットを利用し目的に合った情報を読み取り、取捨選択して、自分の考えをレポートにまとめる。文学研究レポート作成の基本を学ぶ。 著作権のある資料を自分のレポートに掲載する方法を学ぶ。	提出されたレポートの内容を点検する。 レポートに取り組む姿勢を観察する。
六月	（『山月記』授業）			
七月	**（授業実践Ⅰ）** 『山月記』 班別研究レポート	ポスター・セッションをするための情報を読み取り、必要なものを話し合い、まとめることを通して作品理解を深めさせる。	発表を意識した研究テーマを設定する。 学校図書館を利用した情報収集方法を学ぶ。 五人のグループで『山月記』に関する作品研究、作家研究を行う。 自分たちで調べた内容を目的に合わせて構成し、レポートにまとめる。	提出されたレポートの内容を点検する。 班別研究に取り組む姿勢を観察する。
八月				
九月	**（授業実践Ⅱ）** 「プレゼン設計図」 発表資料制作 発表原稿作成 発表準備	情報整理の重要性と発表資料の意義を理解させる。	レポートから発表に適したテーマを設定する。 レポートの内容を要約・再構成して、「プレゼン設計図」を作る。 「プレゼン設計図」を基にポスター、発表原稿を作成する。 発表のリハーサルを行う。	提出された「プレゼン設計図」を点検する。
十月	**（授業実践Ⅲ）** ポスター・セッション	聞き手を意識し、要点を押さえ、簡潔に発表する方法を身に付けさせる。他人の意見を的確に聞き取り、自分の考えをまとめて質問する力を身に付けさせる。	「ポスター・セッション」を行う。 聞き手と質疑応答しながら、自分の考えを的確に伝える。 発表を正確に聞き取り、的確に質問する。	提出されたポスター及び発表原稿の内容を点検する。 ポスター・セッションの実技を観察する。

五　授業実践

（一）予備実践　「村上春樹」研究レポート

〈実施時期〉　平成二十二年五月　二年（情報理数科）

〈単元〉現代文・小説『カンガルー日和』

※対象については、実践Ⅲまで同様である。

ア　ねらい

文学作品レポートの書き方を理解させる。

イ　授業展開と指導上の留意点

授業で村上春樹の「カンガルー日和」を学習した後に、コンピュータ教室を利用して調べ学習を行った。一時間で、インターネットから資料を集め、整理し、次の一時間でそれをＡ４版二枚程度のレポートにまとめさせた。書き方の指導はほとんど行わずに、自由に作成させたが、次の点には留意させた。

①他の生徒と同じようなレポートにならないように、複数のサイトから資料を集める。著作権に配慮し、参考にしたサイトのアドレスは必ず最後に入れる。

②まとめとして自分の考え（感想でもよい）を必ず入れる。

③他人の書いた文章をそのままコピーしただけでは、不自然な文体になるので、全て自分の言葉で書き直しまとめる。

レポートの評価は、次の観点で行った。

①自分の設定したテーマに即した情報を収集しているか。

②自分の考えをまとめとして書いているか。

③自分の言葉で作成しているか。

④指定した形式で書けているか。

ウ　考察と反省

二時間という短い時間にもかかわらず、ほぼ全ての生徒がレポートを作成することができた。しかし、その内容のほとんどは、作者のプロフィールと作品リストに自分の感想を付け加えたものであった。これは、村上春樹の他の作品を読んだことがある生徒がほとんどいないことと、他人の書いた文章を読んだだけでは、作品の特徴、作家の独自性などが十分に理解できないことが原因だと思われる。そこで、この後で実施する『山月記』レポートでは、他の中島敦の作品や同傾向の作家の作品を読んだり、調べたりする時間が十分にとれるように夏季休業中の課題にすることとした。そのためには事前に文学研究の視点やテーマ設定の仕方を指導し、休業中にも何度か進行状況を点検・指導を行う必要があった。

さらに、生徒の調べた作品リストに初版本ではなく文庫本を挙げていたり、参考にしているサイトが実は他のサイトのコピーだったりと、インターネットで調べ学習をする上での注意点が浮きぼりになった。そこで、司書教諭と相談をして、近隣の高校に協力をあおぎ、中島敦に関する本を集めることにした。

（二）授業実践Ⅰ　『山月記』班別研究レポート

〈実施時期〉　平成二十二年七月

ア　ねらい

ポスター・セッションをするための情報を読み取り、必要なものを話し合い、まとめることを通して作品理解を深めさせる。

イ　授業展開と指導上の留意点

（ア）最初の一時間は、教室で班分けと研究方法の説明とテーマ設定の方法について指導した。

①班分け

クラスの構成は、男子三十人、女子十人なので、男子四名＋女子一名の班を六つ、男子三名＋女子二名の班を二つ作った。女子を均等に配置したのは、このクラスは男子よりも女子の方が学習に対し積極的で行動力があるので、女子が偏ると班の格差が広がる可能性があったからである。班の中で一人研究リーダーを決めさせた。

②テーマ設定の条件

『山月記』の成立や内容に関すること。　（作品研究）

または、作者の中島敦に関すること。　（作家研究）

特に今回は研究の視点について、「作家研究」「他の作品との比較」「他の学問から考える」など、かなり具体的に解説した。さらに、『山月記』の授業を終えた直後だったので、レポートの内容は、授業で学んだことをさらに深めたものになるように強調した。

③研究方法

夏季休業中に班ごとに集まって話し合いを重ね、インターネットまたは学校図書館などを利用して、調べ学習とレポートの作成を行った。提出期限は九月一日で、印刷して提出させた。

④レポートの書式と枚数

作成ソフト　Microsoft Word

書　式　Ａ４縦（横書き）　余白＝上下左右二十㎜

１行字数　四十五字　一頁行数四十五行

枚　数　表紙と本文五枚以上

表紙にはテーマ（表題）と班員名（出席番号も）を記載

（イ）次の一時間は、コンピュータ教室でインターネットを利用しながら、テーマの決定を行った。班別に集まり、リーダーを中心に話し合いを行ったのだが、指導者は常に班の間を回り進行状況のチェックと指導を行い、話し合いに参加せず遊んでいる生徒がいないように配慮した。

（ウ）夏季休業中は、学校図書館やコンピュータ教室を利用して班別研究を進めていった。利用できる日を生徒に示し、作成計画を立てさせて、生徒が利用する日には必ず出校するようにし、部活動などで急に出校できない日は、情報理数科の教諭や司書教諭に指導をお願いした。また、生徒の登校日の中で、班ごとに二日以上、指導日を決め、その日は学校図書館に集まって、レポートの進捗状況の確認や、内容についての指導を行った。最初のうちは、何から手を付けてよいのかわからない状態だったが、リーダーを中心に分担して研究を進めていく方法や、作品の比較をするためにはどのようなことに着目すればよいかなど、具体的に指導を加えた。

（エ）この研究レポートの目的は、二学期に予定しているポスター・セッションに備えて、自分たちの設定したテーマについて、できるだけ多くのことを調べさせることにある。そこで、最初からレポートにまとめることを考えずに、テーマに関係のありそうなことは、できるだけたくさん調べさせることに留意した。

〈各班のテーマ一覧〉

① 李徴が変身した動物は、なぜ「虎」だったのか。
② 「闇の中から呼んだ声」を心理学的に考える。
③ 李徴の詩に「欠けていたもの」とは何か。
④ 『山月記』と中島敦の他の作品を比較する。
⑤ 中島敦の生い立ちを調べ、李徴と比較する。
⑥ 人虎伝と山月記　二つの作品を対比し読み解く。
⑦ 『山月記』と関連のある他作品を調べる。
⑧ 李徴にとっての「しあわせ」

【資料１】『山月記』研究レポートの例

①「人虎伝と山月記」より抜粋

私が大きく、『人虎伝』と『山月記』で変わったと思うのが、李徴が皇族の子孫から、普通の田舎者に変わったということだ。『山月記』の李徴が自信を持てなかった理由の一つに自分が田舎者で、他の官僚に比べて身分が低くどこか自分に自信が持てなかったというのがある。だが、『人虎伝』の李徴は、もとから皇族の子孫で、さらには若い頃から、文学の才にも大いに恵まれていたために自分に自信を持っていた。この二人を比較すると、『山月記』の李徴がいかに中途半端・不完全なキャラとして生まれたのかがわかる。だが、これこそが『山月記』が慕われる理由なのかも知れない。私は「人虎伝」を読み、李徴に強い同情・哀れみの念は湧かなかった。だが、『山月記』の李徴に対しては、李徴の身に余る才能を持ちすぎたがための不幸と、そし

て、徐々に薄れていく自我、そのどれもが同情哀れみを誘うに値するものであると私には思えた。

②「『山月記』と中島敦の他の作品を比較する。」より抜粋

『山月記』と『狼疾記』の比較

李徴と三蔵の「臆病な自尊心」

李徴は他人から見ると倨傲で尊大であったが、李徴自身は恥ずかしく思う心が強く臆病で、他人に自分の才能がないことがばれるのを恐れていた。しかし、その一方で自分には才能があると思っていたい気持ちもあったために、役に立たない凡人の仲間にはなれなかった。

三蔵の場合は、人前に出ることをひどく恥ずかしがるのに、自らの高いプライドにより他人を見下して自分を決して他人より下に見ない。そして、才能の不足を他人にも自分にもさらしてしまうかも知れないと恐れ、そんな生き方はしたくないと考えていた。

この二人を比べてみると、「臆病な自尊心」とは、「自分の思想や言動に自信を持っている反面で、プライドを傷つけられることを恐れて、他人に対して臆病になってしまう」気持ちのことだと考えた。

二つの作品には多くの共通点があり、読み比べることで片方の作品だけではわかりにくかったことを深く読み取ることができるということを学んだ。

ウ　考察と反省

①の班は、『人虎伝』と『山月記』を比べ、二作品の違いは中島敦が伝えたかったことにつながるという発想から、右のような考えを述べている。李徴の設定を皇族から地方出身の普通の青年に変えることで、李徴の心情が読者に理解しやすくなっていることを読み取ることができている。

②の班は、二つの作品に共通して「臆病な自尊心」という言葉が出ていることに注目して、李徴と三蔵の気持ちを比較することで、作品に対する読みをより深めることができている。

これらの生徒のレポートから、課題研究を行うことで授業での読みを、さらに深められることを実感した。また、今回の課題研究がスムーズに進んだ理由には、中島敦は作品が少なく、どの作品も短くて読みやすいために、他作品と比較しやすかったことが挙げられる。さらに、中島敦のと李徴の間に生い立ちや心情的な部分で共通点が数多くあるため、作者研究の視点が生徒でも設定しやすく、さらに虎に変身するなどの非現実的な部分もあるため、神話や物語との比較や、生物学、心理学などの他の学問からの発想を取り入れることもできるなど、『山月記』が課題研究の入門に最適な作品であることもわかった。

もう一つ、夏季休業中を利用することで、司書教諭や他の学校図書館の協力を得られたことも大きかった。今回のような課題研究は、新学習指導要領でも各教科で取り入れていくことを重視している。しかし、授業時間内で全てを行おうとすると、調べ学習に使う時間やコンピュータ教室の確保などが難しい。また、授業では一人で四十人を同時に相手することになるので、指導の負担が大きい。その点、夏季休業中を使えば、コンピュータ教室も長時間使用できるし、班別に呼び出すことで、指導の負担も減った。さらに、司書教諭にお願いして、近隣の高校から中島敦に関する図書をできるだけ集めてもらった。もちろん貸し出しはできないが、学校図書館でなら複数の生徒が中島敦の他の作品を同時に読むことができたので、研究時間の短縮が図れた。そして、学校図書館という特別な場所で限られた時間で読書をすることで、かえって集中して読むことができた。

（三）授業実践Ⅱ　プレゼン設計図の作成

〈実施時期〉　平成二十二年九月

ア　ねらい

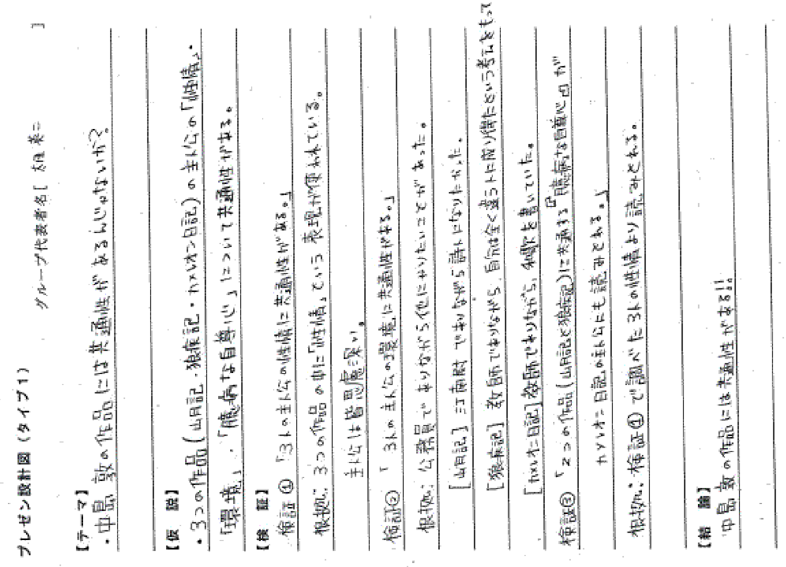
情報整理の重要性と発表資料の意義とを理解させる。

イ　プレゼン設計図について

夏季休業中に作成した研究レポートの内容を、五分以内で適切にまとめるためには、自分たちが最も主張したいことを明確に意識した上

で、時間の経過に沿って、根拠となる資料や自分たちの考察を聞き手が理解しやすいように構成していかなければならない。そこで、ポスター・セッションの資料作成前に、二つのタイプの「プレゼン設計図」を作成させた。

【資料２】プレゼン設計図「タイプ１」の例



プレゼン設計図（タイプ1）　グループ代表者名［　組　番　］

【テーマ】
・中島敦の作品には共通性があるんじゃないか？

【仮説】
・3つの作品（山月記・狼疾記・カメレオン日記）の主人公の「性情」・「環境」・「臆病な自尊心」について共通性がある。

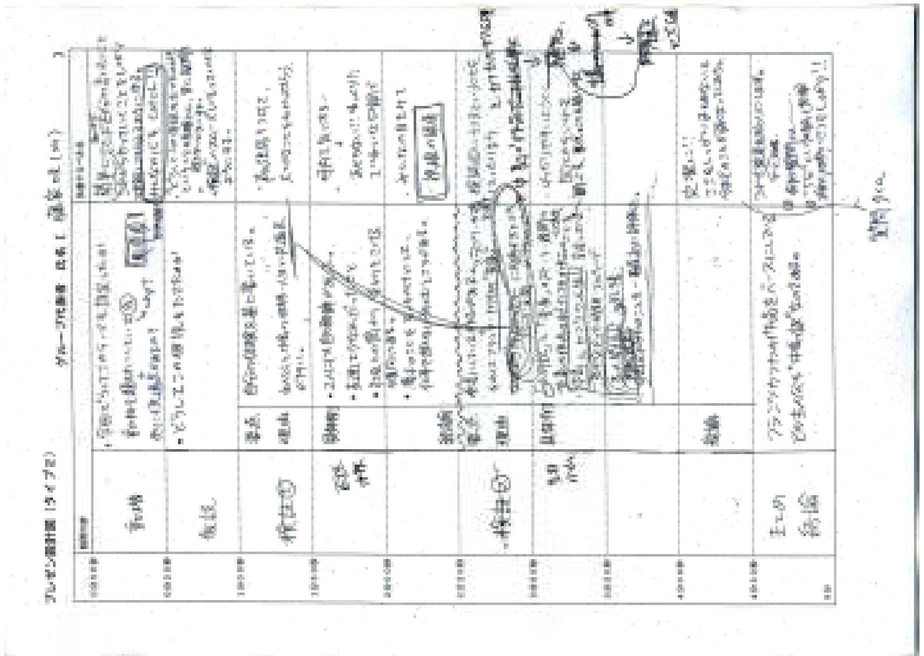
【検証】
検証①「3人の主人公の性情に共通性がある。」
根拠：3つの作品の中に「性情」という表現が使われている。
主人公は思慮深い。
検証②「3人の主人公の環境に共通性がある。」
根拠：公務員でありながら他にやりたいことがあった。
［山月記］江南尉でありながら詩人になりたかった。
［狼疾記］教師でありながら、自分は全く違うものに憧れたという考えをもっていた。
［カメレオン日記］教師でありながら、和歌を書いていた。
検証③「2つの作品（山月記と狼疾記）に共通する"臆病な自尊心"が
カメレオン日記の主人公にも読みとれる。」
根拠：検証①で調べた3人の性情より読みとれる。

【結論】
中島敦の作品には共通性がある!!

①プレゼン設計図「タイプ１」

自分たちが最も主張したいことを明確にして、常に意識させることで、発表内容が途中でずれたり、必要以上のことを盛り込むことを避ける目的で作成させた。主張を明確にするためにも「テーマ」「仮説」「検証」「結論」の四つの項目に従って、必要最小限の言葉で書き出すことを留意させた。

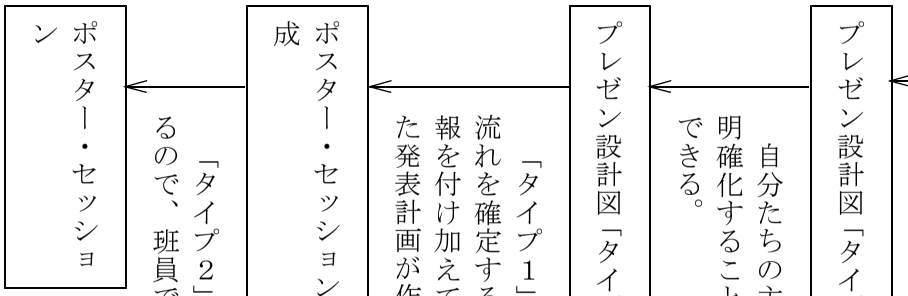
【資料３】プレゼン設計図「タイプ２」の例



②プレゼン設計図「タイプ２」

決められた時間内に、聞き手が理解しやすい発表を行うためには、プレゼン設計図「タイプ１」で確認した「テーマ」「仮説」「検証」「結論」の四つの項目を、時間の流れに沿って効果的に配置する必要がある。設計図自体は、表を三十秒ごとに線で区切っただけの簡単なものだが、そこにプレゼン設計図「タイプ１」から書き出したことだけではなく、その他の説明内容を書き入れていくことで、発表の流れ全体をひと目で把握できるようになる。【資料３】の例では、一度作成した後、何度も修正が書き加えられているが、このようにプレゼン設計図「タイプ２」を作成することで、班員全員で全体の構成を眺めながら、流れを練り直すことで、よりわかりやすい発表を行うことができる。

【資料４】プレゼン設計図フローチャート



ウ　授業展開と指導上の留意点

この実践には二時間を配当した。最初に、研究レポートを班ごとに五部印刷させて、班員一人ずつにもう一度読ませてから、プレゼン設計図「タイプ１」の作成に入らせた。

四つの項目は、次のように書かせた。

①「テーマ」には、自分たちが『山月記』を読んで「疑問に思ったこと」「考えたこと」を書く。問題提起と考えてよい。

②「仮説」には、「テーマ」に対して、自分たちが考えた結論を書く。

③「検証」には、「仮説」を証明するために根拠となる事実や推論を書いていく。

④「結論」には、「検証」によって導き出された答えを書く。

でき上がったプレゼン設計図「タイプ１」を、指導者が確認し、指導を加えた後で、プレゼン設計図「タイプ２」の作成に入らせた。プレゼン設計図「タイプ２」が完成した班から、ポスター・セッションの資料・発表原稿作成に入った。

特に留意すべき点は、自分たちが作成したものでも、Ａ４サイズで五枚もある研究レポートの中から自分たちの主張を抽出することは、こちらが想像する以上に生徒には難しく、プレゼン設計図「タイプ１」の段階でつまずいてしまう班もあった。進行状況に気を配りながら、適切な助言や指導を加えていく必要があったと考える。

エ　考察と反省

二つのタイプのプレゼン設計図を作らせた目的は、既に述べたとおりであるが、ポスター・セッションの後で行った生徒アンケートでも、全体的にプレゼン設計図は役に立ったと考えている生徒が大多数であることから、その効果はあったと考えてよいだろう。しかし、プレゼン設計図「タイプ１」に比べ「タイプ２」を「あまり役に立たない」と答えた生徒が多いということは、いきなり発表資料を作るよりも設計図はあった方がよいが、二つ作る必要が感じられない生徒がいたということである。これは、二つの設計図の意味の違いや目的を十分に指導できなかったことでもあり、今後の反省点

と言える。

しかし実は、発表の評価が高かった二つの班では「タイプ２」の重要性を認めており、「タイプ２」を使いこなせた班の方が、優れた発表をすることができたと考えられる。それは、「タイプ１」で主張は明確になっていても、「タイプ２」のような時間の流れに沿った発表計画がきちんとできていなければ、聞き手に自分たちの考えを十分に伝えることができずに、わかりやすい発表にはならなかったということで、やはり、「タイプ２」を作成させることは有効であり、必要なものであると言えるだろう。

（四）授業実践Ⅲ　ポスター・セッション

〈実施時期〉　平成二十二年十月

ア　ねらい

聞き手を意識し、要点を押さえ、簡潔に発表する方法を身に付けさせる。他人の意見を的確に聞き取り、自分の考えをまとめて質問する力を身に付けさせる。

イ　授業展開と指導上の留意点

（ア）発表形式

①一時間に一つの教室で四班の発表を同時に行う。

②ポスターはＡ３用紙二十枚以内とする。

③パネルは教室の四隅に立てる。

④発表に五分、質疑応答に五分を予定し、一時間の中で、四回の発表を行う。

⑤発表を行わない二十人は、聞き手として四つの班の発表を聞き評価表を使って相互評価を行う。

⑥聞き手はできるだけ質問をすることとし、よい質問をした者の名前を、評価表に記録する。

⑦発表後に反省とアンケートを行い、生徒により一層の改善策を考えさせるとともに、今後の指導に役立てる。

（イ）授業展開

この実践には、資料・発表原稿の作成に二時間、ポスター・セッション本番に二時間、まとめに一時間を配当した。

最初は、プレゼン設計図「タイプ２」を基にして、班員全員で分担して資料と発表原稿をコンピュータ教室で作成した。使用したソフトは、Power Point である。ポスター・セッションでは、紙に印刷して発表をするため、アニメーションなどの効果を付ける必要はなく、ほとんど文字だけなので、作成に時間はかからなかった。資料と原稿の完成後の残りの時間は、班ごとにパソコンを使って、リハーサルを行った。また、発表の前に放課後を利用して、一度本番と同様のリハーサルを行わせ、話し方、資料の見せ方などの指導を行った。この時に言葉だけでは伝わりにくい癖や表情などは、ビデオカメラを使って、自分の姿を客観的に見せて指導した。

ポスター・セッションには、次の八つのテーマが発表された。

・「李徴を虎から人間に戻すことは可能か？」
・「人虎伝と山月記の作品比較」
・「中島敦の作品には共通性があるのではないか？」
・「中島敦の作品には法則があるのではないか？」
・「李徴。なぜ虎に変わったのか。闇から呼んだ声は何なのか」
・「なぜ虎でなければならなかったのか」
・「李徴の詩に欠けてるものは」
・「中島敦は李徴なのでは？」

この中からくじ引きで、先に発表する四班と後から発表する四班を選んだ。発表当日は、休み時間の間に資料をパネルに貼り付けておき、すぐに発表に入れるように準備をさせておいた。

授業開始から五分間で、聞き手の生徒に評価表を配付し、もう一度発表の流れと、授業の目的を全体に確認した。聞き手が、ほぼ均等にパネルの前に立ち、聞く体勢ができたのを確認してから「スタート」の合図で発表を開始させた。指導者は、四分経過したところで、「残り一分です」と声をかけ、五分経過したところで、「終了」と声をかけ、発表を終わらせた。その後、五分間の質疑応答の時間に入った。

ストップウォッチで時間を測りながら、発表側の実技評価と聞き手側の生徒の態度評価を行った。

もともと、このポスター・セッションという方法を試みようと考えた動機の一つに「質疑応答がしやすい」という点があった。そこで、質疑応答が積極的に行われるように、一回の質疑応答の中で最もよい質問をした生徒の名前と質問を記入する欄を評価表に設けた。質疑応答の後、聞き手を別のパネルの前に移動させてから、二回目の発表を開始した。以上の流れを四回繰り返して、第一回目のポスター・セッションを終了させた。指導者から、全体を通しての感想と、次回の発表の連絡を行って、授業を終わらせた。後半の四班の発表も、次の授業時間に同様の流れで行った。

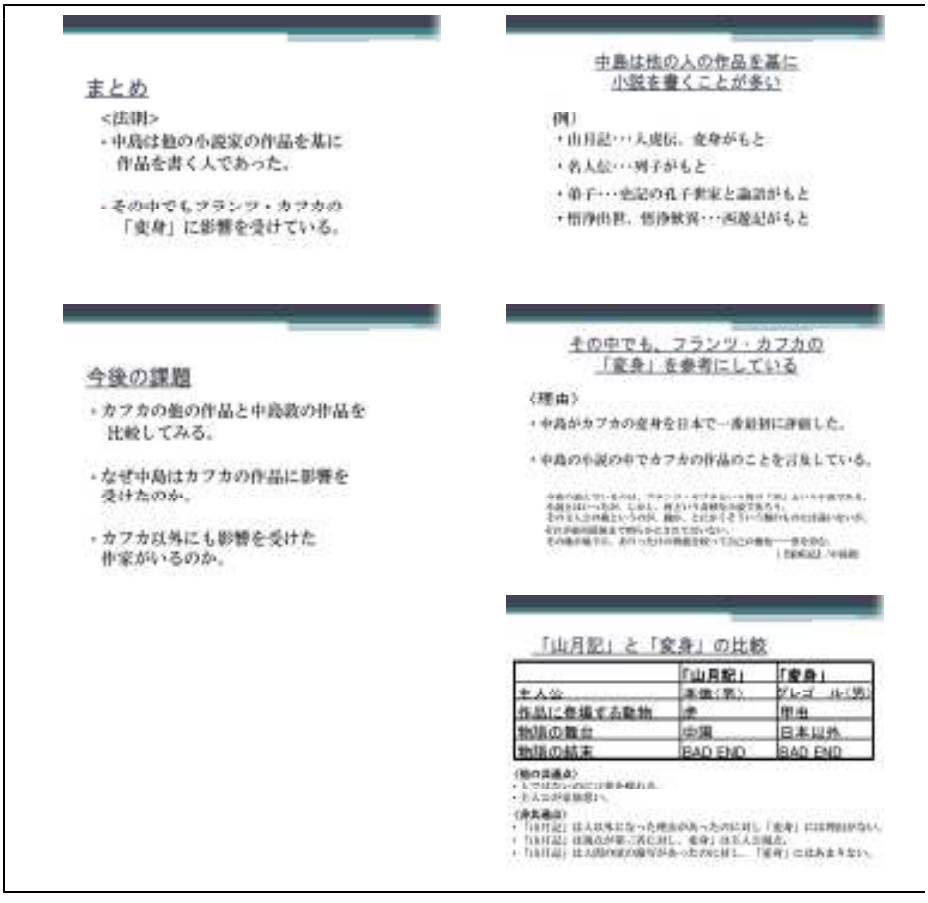
（ウ）指導上の留意点

この実践では、生徒たちが積極的に取り組む雰囲気を最後まで保つことが重要であると考えたので、リハーサルの時に発表内容をほめて自信を持たせることと、他の班のよかった点を教え競い合う気持ちを持たせることを留意した。

【資料5】生徒のポスター作品例

ウ　考察と反省

発表に関しては、どの班も制限時間にまとめることができた。これは、プレゼン設計図とリハーサルの効果があったと考えられる。また、質疑応答に関しても、こちらが予想していた以上に活発に行われていた。例えば、李徴が虎になった状況を二重人格と同じと解釈し、「人が虎になったならば、その原因を取り除けば、虎から人に戻すことも可能ではないか。」という主張に対し、「李徴が人間に戻って本当に幸せ



になれるのか。」という質問が出たり、『山月記』とカフカの『変身』を比較した発表に対し、「他の作品との比較はしたのか。」等の、きちんと相手の発表の意図を理解した上での適切な質問がされていた。このことから、ポスター・セッションは、生徒の「聞く力」を育成する効果があったと考えられる。また、発表を四回繰り返す中で、発表する側の生徒は、話し方やしぐさ、資料の使い方、説明の簡略化など、自分たちで話し合いながら修正していくことで、「話す力」をさらに高めていくことができた。

反省点としては、肝心の発表内容に関する指導が十分にできなかったことである。例えば、中島敦とカフカの比較をした班では、『山月記』と「変身」の比較をしただけで、他の作品までは比較できていなかった。また、李徴が二重人格であったと仮定した班では、なぜ体が虎に変わったのかという点を質問されて、聞き手を説得できるだけの答えができなかった。これは、班別研究レポートの内容を十分に指導できなかったことと、生徒の文学に関する基本的な知識不足が原因と考えられる。

【資料6】生徒アンケート

質問1　自分たちの発表は成功だった。
　とてもそう思う　21%　ややそう思う　34%
　あまりそう思わない　42%　全くそう思わない　3%

質問2　ポスター・セッションで「話す力」が身に付いた。
　とてもそう思う　50%　ややそう思う　47%
　あまりそう思わない　3%　全くそう思わない　0%

質問3　ポスター・セッションで「聞く力」が身に付いた。
　とてもそう思う　42%　ややそう思う　53%
　あまりそう思わない　5%　全くそう思わない　0%

質問4　ポスター・セッションで『山月記』の理解が深まった。
　とてもそう思う　32%　ややそう思う　63%
　あまりそう思わない　5%　全くそう思わない　0%

【資料7】生徒の感想

〈「話す力」「聞く力」について〉
- **山月記に抱いていた疑問を追求し、他人に伝えるという過程の中で、話す力、人に情報を伝える力、疑問点を追求する力が付いた。**
- **根拠や仮定を詳しく考えながら他の人に話して伝えられた。**
- **質疑応答の時に会話に近い感じで議論ができた。**
- **相手の意見を自分なりにまとめて質問するのに、相手の要点をまとめることは重要だと思った。**
- **質問するために、細かいところまで聞きもらさないようにした。**
- **相手の発表を良く聞き、それについて考え、質問することができた。**
- **「発表を聞く」という面でも、「質問を聞く」という面からでも「聞く力」を身に付けられた。**

〈調べ学習について〉
- **調べることで背景にどんなものがあるか知ることができた。**
- **様々な切り口から山月記を見ることができた。**
- **授業を受けた後、自分たちで調べたことで、学習が深まった。**
- **山月記をより深く読み取り、考察した。**
- **授業だけではわからなかったことがわかるようになった。**
- **多くの資料も調べたし、自分で新たな考察も生まれた。**
- **自分の中で山月記の見方が、はじめて読んだ時と比べて大きく変わった。**

六　まとめ

（一）仮説の検証

「話す力」「聞く力」をはぐくむためにポスター・セッションが有効ではないかと仮説を立てて実践を行ってきたが、実践終了後に行った【資料6】生徒アンケートの質問2・3を見ると、約九割の生徒が「話

す力」「聞く力」を身に付けることができたと感じている。このことから、ポスター・セッションの有効性は検証できたと思われる。また、生徒の感想から、実践を通して、改めて「話す力」「聞く力」の重要性を感じられたことが読み取れる。

実際にポスター・セッションを行ってみると、最初考えていたとおり、発表者と聞き手との距離が近く、聞き手の人数が少ないことで、生徒は緊張せずに、聞き手を意識した発表ができた。発表の技術的な面に関しては、「棒読み」よりはずいぶんよかったが、まだ原稿を「読む」だけの生徒も多く、「話す」ように発表ができていた生徒は少なかった。しかし、その後の質疑応答では、生徒の多くに、相手の質問に対してその場で自分たちなりに理解し直そうとする姿勢が見られ、その質問に対する回答も自分たちできちんと協力して考え、臨機応変に答えることができた。これは、発表者と聞き手の距離が近いため、普段の「会話」に近い状況であるため、誠実に答えなければならないという心理状態が生まれるためではないだろうか。このことからも、ポスター・セッションは、「話す力」をはぐくむことに対して有効であると考えられる。

また、聞き手の多くの生徒が、相手の話に集中して注意深く聞くことができていたが、これは、発表に対して自分の考えを述べたり、質問をするためには、相手の話を聞きながら要点をまとめ、同時にそれについて自分なりに考えなければならないことがわかったためであり、そのことは生徒の感想からもうかがえる。実際に生徒の「聞く力」が、この実践だけで格段に高まるものではないが、きちんと聞くことが考えることや意見を言うことにつながることを理解できたことだけでも、ポスター・セッションが「聞く力」をはぐくむために効果があると言えるのではないだろうか。

そして、今回の実践でとても効果があったのが「プレゼン設計図」であった。それも、二つのタイプを書かせたことで、自分たちの主張を明確化することと、時間軸に沿った発表の流れを設計すること、つまり、「中心」と「全体」を視覚化したことによって、その後の資料作成や発表準備を短時間で終わらせることができた。

さらに、夏季休業中を利用することで、時間をかけた調べ学習ができたこと、その際に学校図書館を利用することで、普段から読書習慣が身に付いていない生徒に、集中して読ませることができたことも、予想外の効果であった。これらの調べ学習によって、生徒が『山月記』という作品の理解をより深めることができ、「読む力」をはぐくむことに有効であることが、質問４や生徒の感想でもわかる。

（二）今後の課題

ポスター・セッションが「話す力」「聞く力」をはぐくむために効果があることは検証できた。さらに、ポスター・セッションを行うためには調べ学習において「読む力」、レポートや資料作成においては「書く力」が必要であり、実践全体を通して、総合的に情報発信能力を身に付けることに有効であることがわかったので、これからも、この実践は継続していきたい。

実践を行ったが、新学習指導要領では、国語総合の中で、話すこと・聞くことを主とする指導に十五から二十五単位時間を配当するものとされているので、国語総合での実践も考えていきたい。

七　おわりに

言語を通して適切に表現したり的確に理解したりして、円滑に相互伝達、相互理解を深めていく能力を身に付けさせることは、国語教育の目標であり、「話す力」、「聞く力」をはぐくむことは、現在の高校生に不足している「コミュニケーション能力」をはぐくむことであり、それは結局のところ生徒の「生きる力」をはぐくむことである。今回の実践を通して、それを、どのように指導していけばよいのか改めて考える機会となった。

最後になりましたが、今回の研究をまとめるに当たって御指導下さいました指導主事の○○○○先生、教科指導員の○○○○先生、○○○○先生、教科研究員の先生方に心からお礼申し上げます。